

Hi, Friends! と中学校の教科書の語彙的比較 —頻度とコロケーションの観点から—

Comparing Vocabulary Patterns in *Hi, Friends!* and Junior High School Textbooks : From the Perspectives of Frequency and Collocation

佐藤 剛*・秋田谷桃花**
Tsuayoshi SATO*・Momoka AKITAYA**

要 旨

本稿は、小学校外国語活動の教材である、*Hi, friends!* と中学校英語検定教科書とを、語彙の観点から比較することで望ましい小中連携の在り方を模索するものである。そのため、それぞれの高頻度動詞の語彙リストを作成し、コロケーションの比較を行った。結果、*Hi, friends!* には、現在形を使用した単純な英文が多いこと、児童にとって身近で限られた語彙を繰り返し使用していること、主に教室英語で用いられる動詞が高頻度で出現する傾向が観察された。一方、中学校検定教科書においては、現在形に加えて過去形や未来表現、さらには助動詞に後続する形などの多くのバリエーションをもって動詞が使用されていること、前の文に関連したまとまりのある英文が見られること、*think* や *know* のように、名詞節を伴う複雑な構造を伴う形で動詞が用いられていることが観察された。上記から、*Hi, friends!* と中学校英語教科書の、それぞれの教材の特徴を踏まえた指導をすることの必要性が示唆された。

キーワード：小学校英語教育 教材分析 語彙指導

1 はじめに

2020（平成32）年度から新学習指導要領の全面实施により、小学校5・6年生において英語が教科化され、小学校3・4年生においても外国語活動が開始される。特に語彙指導においては、新学習指導要領で小学校の4年間において600～700語を扱い、中学校3年間では小学校で学んだ語を踏まえて、1600～1800語を指導することが示され、指導する語彙数が大幅に増加した。このように、小学校3年生から中学校3年生までの7年間にわたる、英語のより系統的な指導が求められることになった。

英語の授業において指導されるさまざまな項目の中でも、語彙は時間をかけて定着させる必要があり、体系的な指導が大切な要素の一つである。語彙指導の際、目の前の学習者がそれまでの学習経験を通して、

指導しようとする語彙にどのような形で、触れてきたかを知っていれば、過去の学習と現在の学習を関連付けた指導が可能となり、よりよい学びに繋げることができるであろう。小学校、中学校、高等学校の教員にとって互いの教科書で使われている語彙やコロケーションの類似点や差異を知ることは適切な語彙指導を行う上で非常に重要である。

しかし、限られた時間での教材研究の中で、教員自身が語彙の特徴や違いを捉えることは難しい。指導する語彙がそれぞれの教材でどのように扱われているかを客観的な指標をもって明らかにすることができれば、実際の授業場面において、語彙を指導する際に役立てることができるという着想を得た。

そこで、本研究では *Hi, friends!* と中学校の英語検定教科書に現れる語彙の傾向を比較することで、それぞれの教材がどのような特徴を持つのかを語彙の

* 弘前大学教育学部

Department of English Education, Faculty of Education, Hirosaki University

** 弘前大学教育学部学校教育教員養成課程4年

Senior of Teacher Training Division, Faculty of Education, Hirosaki University

観点から明らかにする。そのための方策として、まず *Hi, friends!* と中学校英語教科書の高頻度動詞を比較してその特徴を捉える。次に、*Hi, friends!* の高頻度で現れる動詞のコロケーションを小・中学校の教材で比較することでその傾向を考察する。最後に、*Hi, friends!* と中学校教科書をそれぞれ一般的に使用される英語データのコーパスと比較し数値として示すことで、円滑な小中連携の在り方に対する示唆を語彙指導の面から捉えていきたい。

2 先行研究

近年、コンピューターの発達により、大規模なデータ処理が可能となったことから、語彙研究においても、コーパスを活用した様々な研究が行われ、そこから得られた知見をもとに、多くの指導法や教材が提案されている。具体例としては、British National Corpus (BNC) の語彙リストと、そのカバー率から、ネイティブスピーカーの語彙サイズを算出し、そこから、外国語学習者にとって必要となる語彙サイズを推定しようという研究がある (Goulden *et al.*, 1990; Zechmeister *et al.*, 1995; Nation 2001)。

投野 (2006) は、British National Corpus (BNC) の語彙リストや、コロケーションの分析から、リストの上位を *have* や *do* などの基本動詞と前置詞などの機能語を占めることを明らかにした。それらが英語の骨格であり、英語を学習する際には、まずこの骨格となる高頻度語の使い方に習熟することが重要であるとしている。さらに、内容語と機能語など、個々の語彙の特徴に応じてメリハリをつけた語彙学習が効果的であることを示唆している。

その一方、小学生や中学生など初級学習者を対象とした研究は少ない。佐藤 (2013) は、平成24年度版の中学校英語検定教科書をデータ化し、それを頻度やコロケーションの点から分析した。その結果、語彙リストに見られる高頻度語は、冠詞や代名詞、前置詞などの機能語に占められていること、高頻度の動詞は、*be* 動詞、*have*, *like*, *said*, *see*, *go*, *know*, *want*, *look*, *help*, *get* であること、どの教科書においても、総語数、異なり語数、ギロー値が、平成18年度版よりも増加している傾向にあることを明らかにしている。その上で、頻度やコロケーションを考慮した上で、語彙指導を行うことがより効果的な指導につながると結論付けている。

3 リサーチクエスション

本研究は、小学校の外国語活動において、主たる教材として使用されている *Hi, friends!* と中学校における主な教材である検定教科書を語彙の面から比較・分析し、それらの共通点や差異を明らかにすることによって、効果的な語彙指導の在り方と小・中学校のスムーズな連携の在り方を語彙の面から考察するものである。そのため、以下の3つのリサーチクエスション (RQs) を設定した。

RQ1 *Hi, friends!* と中学校英語教科書における高頻度動詞にはどのような違いがみられるか

RQ2 *Hi, friends!* の高頻度動詞のコロケーションは中学校英語教科書と比較してどのような違いがみられるか

RQ3 *Hi, friends!* と中学校英語教科書はネイティブスピーカーによって使用される語彙と比較してどのような違いがみられるか

4 研究方法

(1) 分析対象とした教材

本研究では、小学校の英語教材として、*Hi, friends!* 1 及び *Hi, friends!* 2 児童用テキストの全文を分析対象とした。さらに、教師用指導書にある児童や教師の発話例なども分析対象とした。

また、中学校の英語教材として、平成28年度版 *Columbus 2* (光村図書)、*New Crown* (三省堂)、*New Horizon* (東京書籍)、*One World* (教育出版)、*Sunshine English Course* (開隆堂出版)、*Total English* (学校図書) の生徒用の教科書の言語データおよび教師用指導書に見られる英文全てを分析対象とした。

(2) データの分析方法

データの分析にあたっては、使用教材の英文をテキストデータ化した上で、コンコーダンスー AntConc を使用し、以下の処理を実施した。

まず RQ1 の為の手だてとして、語彙リストを作成し *Hi, friends!* と中学校英語教科書それぞれの高頻度上位20の動詞とその頻度を示し、その違いと傾向を比較した。

次に、RQ2 の為の手だてとして、*Hi, friends!* の高頻度上位10の動詞を、その共起語を調査する目的で、中心語から右3語を範囲としてコロケーションを集計した。*Hi, friends!* と中学校教科書、それぞれ上位5

語を抽出し、その差異や特徴を比較した。

最後に、ネイティブスピーカーの使用する英語コーパスと小・中学校のテキストにおける語彙の傾向を比較する為に、RQ3では*Hi, friends!*、中学校英語教科書、British National Corpus (BNC) を対象として比較を行った。*Hi, friends!* の高頻度上位20の動詞のz得点を*Hi, friends!*、中学校英語教科書、BNCそれぞれで算出した。また、小学校、中学校のテキストと、英語の一般的なコーパスと比較する為に、AntConcのKeyword List機能を用いて、BNCと比較して特徴的に表れる高頻度動詞、低頻度動詞を*Hi, friends!*、中学校教科書それぞれで調査した。また、それらの相関係数を算出した。

5 結果と考察

5.1 高頻度動詞の違いについて

5.1.1 高頻度動詞リストとそれらの比較

表1は*Hi, friends!*と中学校英語教科書にみられる、高頻度動詞上位20語の語彙リストである。ここから観察されるそれぞれの特徴としては、以下のようなものが挙げられる。

まず、*Hi, friends!*については、中学校英語教科書の高頻度動詞には挙げられなかったものが24語中15語あり、その半分以上が異なる結果となった。そこで、小学校の教科書にのみ高頻度で現れる動詞を、以下のように2つのグループに分け、その要因を考察した。1つ目のグループとして、*play, eat, swim, study, ride, cook, meet*のような、児童が日常生活で行う行動・行為を表現するための動詞が挙げられる。小学校では、児童の日常生活に関する題材を中心に学習が行われるため、上に挙げられた動詞が頻出していたものと思われる。さらに、*play, eat, cook*などは目的語としてとる名詞のバリエーションが多い動詞であることも原因と考えられる。これらの動詞のコンコーダンスラインには、似たようなパタンの表現の繰り返しや歌やチャンツに使われ、何度も出現している様子が観察された。

2つ目のグループは、*listen, make, look, write, open, close, say, start*に挙げられる、教師が授業内で児童に教室英語として指示する場合によく使用される動詞である。全体的に外国語活動が中学校と比較して、活動やゲームを多く用いることがその要因と考えられる。また、*Hi, friends!*の指導編では教室内での指示を始めとした教師の英語での発話例が多く掲載

表1 小学校と中学校の高頻度動詞

Rank	Word	頻度 (小)	Word	頻度 (中)
1	is	173	is	1258
2	like	118	was	665
3	do	119	are	627
4	go	100	have	622
5	am	67	do	588
6	are	62	am	459
7	play	57	like	431
8	be	27	see	253
9	listen	26	go	245
10	eat	19	be	221
11	see	18	want	218
12	swim	18	did	203
13	make	17	were	188
13	study	17	said	187
15	ride	15	think	166
16	cook	14	know	154
16	look	14	get	149
18	write	11	went	147
19	open	10	use	146
20	close	9	take	141
20	get	9		
20	meet	9		
20	say	9		
20	start	9		

注) 網掛けは語彙リストの中で小中単独で出現した語である。

されている。このことから、英語の指導経験の少ない小学校教師にとって、*Hi, friends!*の教師用指導書が、教室英語を話すための補助的役割として機能していることが分かる。

次に、中学校英語教科書の高頻度動詞にみられる特徴として、*was, did, were*など過去形が多く現れることが挙げられる。また、*am, is, are, was, were*の原形である*be*は、小学校にも出現しているが、その多くは、“want to be ~”という将来の夢を表す際の定型表現として用いられる場合がほとんどである。一方、中学校では*will*や*must*などの助動詞が導入されることに伴い、“want to be ~”に限定されることなく、より多様な形で用いられている。このようなことから、中学校の教材にみられる動詞の特徴として、様々な時制で使われることや、助動詞などを伴うなどより多様な形で使用されることが挙げられる。次に、*think*や*know*など、節を目的語としてとる動詞が高頻度で用いられていることも伺える。*Hi, friends!*において、これらの動詞は、「あなたは どう思う」と

いう意味で用いられる“*What do you think?*”や、「わかりません」という意味で用いられる，“*I don't know.*”のように、決まり文句として扱われている。しかし、中学校英語教科書では，“*I think I'm a good cook.*”や，“*They know that their lessons are very important.*”のように節を伴う形で用いられることが一般的である。このように、より複雑な文構造をとる動詞が高頻度で用いられることも、小学校には見られない中学校英語教科書独自の特徴である。

5.1.2 RQ1への考察

これらのことから、「*Hi, friends!*と中学校英語教科書における高頻度動詞にはどのような違いがみられるか」というRQ1への答えとして以下のことを考察した。

まず、1つ目として取り上げる内容と文の構成に違いがあると考え。 *Hi, friends!* では、“*I like apples.*”や“*I can play soccer.*”などのように児童の身の周りのことを、SVOやSVCで構成されている3語や4語の簡単な文で表している。対して、中学校英語教科書では、“*I think we should have school uniforms.*”のように、*think*や*know*などの動詞に節を伴うなど、自分の考えや気持ちを、より複雑で長い文を使って表現するという特徴が見られた。扱う内容としても、小学校では好きなことや、出来ること、身の回りのことを簡単に表していたのが、中学校ではさらに、第三者のことを表す、あるテーマについて自分の考えていることを表すなど、表現できる内容の幅も大きく広がっている。このように、小学校と中学校を通して、取り扱う内容が発展していくので、指導に当たる教員は、それぞれのカリキュラムを把握していることが重要であることが再認識できた。

2つ目として、*Hi, friends!*と中学校教科書において、学習者がどこから主にインプットを得ているのかという点にも違いがあると考えられる。上記の通り、*Hi, friends!*では、*listen*, *open*, *close*のように教師が児童に指示するなど教室英語において使用する動詞が高頻度で現れた。このことから、教師による英語の発話が、児童が得るインプットの中で、多くの割合を占めていると推測される。それに対して、中学校英語教科書ではこれらの動詞が高頻度の動詞としては現れていない。つまり「読むこと」の指導が本格化する中学校の英語の授業において生徒は、教師による指示だけではなく、教科書本文やスモールトークを始めとしたクラスメイトや教師の発話など、様々なものから

インプットを得ているものと考えられる。このように小学校から中学校へと段階的にインプットのバリエーションが増えていくという特徴があると推測される。この特徴を生かすために、小学校でも、教師に限られた数の教室英語のみでインプットを行うことに加えて、インフォメーションギャップなどを利用して、児童が思考・判断しながら英語を聞くようなインプットを段階的に与えていくことが大切であると考え。また、学習が進むにつれて、インプットに加えて、教師の英語での発問に手を挙げて返答するなどアウトプットを要求しない形式から、単語レベルの一語発話などのように簡単な英語で返事をする形式など、徐々に児童が英語を話す機会を増やしていき、中学校では教師生徒共に、授業内で英語を使ってコミュニケーションを行うような学習につなげていく事が有効であると考えた。

5.2 高頻度動詞のコロケーションの違いについて

次に、*Hi, friends!*の高頻度動詞が、*Hi, friends!*と中学校英語教科書それぞれにおいて、どのような語とともに使われているのかコロケーションについて考察する。

5.2.1 isのコロケーション

表2は、*is*のコロケーションを示している。ここでは、*Hi, friends!*において*what*と*this*が特徴的に表れている。これは、“*What is this?*”という表現が*Hi, friends!*で64回と高頻度で出現していることが原因である。児童の身の回りのことを英語で表すという小学校外国語活動の特徴が表れていると見なすことができるだろう。対して、中学校教科書においては、“*What is this?*”という表現は1度しか出現していない。対して、小学校に出現しなかった語として*the*が挙げられる。小学校における、全ての*is*のコロケーションにおける*the*は教師またはCDによる発話であり、児童による発話例では一切見られない。これは、このような冠詞の扱いに関して、小学校では児童にアウトプットまでは要求せず、英文を聞かせるだけにとどめていると推測される。対して中学校では、生徒の発話例にも*the*が観察されることから、小学校では冠詞を使い分けるための基礎を培い、中学校の学びへ移行するという指導上の配慮が感じられる。また、定冠詞である*the*は、“*I saw a soccer game there. It was a very exciting game. My favorite team won the game, so I was very happy.*”のように、既出の名詞

が、旧情報として繰り返されるときに使用されることが多い。つまり、中学校では、あるトピックについて、語句を繰り返したり、関連させるなど、よりまとまりのある、より長い文が扱われる傾向があることを示していると考えられる。

表2 isのコロケーション

<i>Hi, friends!</i>		中学校教科書	
Word	頻度	Word	頻度
1	it	a	196
2	this	the	189
3	is	it	119
4	a	I	93
5	what	my	87

5.2.2 likeのコロケーション

表3はlikeのコロケーションを示したものである。ここでも、小・中学校の共起語の傾向が大きく異なっていることが分かる。それぞれのコンコーダンスラインを確認したところ、小学校でandが現れているのは、“I like black and white.”など好きなものを列挙することが多いためであった。この表現は、小学校の外国語活動で多く用いられる活動であるチャンツの一部として使われているため、高頻度で出現すると考えられる。英語のリズムを大切に、音声に慣れ親しませようとしている小学校外国語活動ならではの特徴と見なすことができる。

*Hi, friends!*には現れない中学校の検定教科書独自の共起語としてはtoが挙げられる。コンコーダンスラインを分析した結果、これは中学校において、“I'd like to ~”の表現で主に出現していることが明らかになった。これは小学校の活動には一度も出現しない表現であるため、学習者は中学校でこの表現に出会った際に理解に困難を感じる事が予想される。そのため、この表現の指導に当たっては動画などで“I'd like to ~”が使われている色々な場面を提示しながら、音声言語として意図的にたくさん聞かせるなど、学習者が表現に慣れ親しむための工夫が必要である。最後に、theとitが高頻度で共起していることも、likeの共起語の特徴である。これは、上記のisで論じたように、中学校では既出の事柄について、“I like the color.”や“I like it.”のように、意見を述べるなど、よりまとまりのある長い文が扱われていることが示している。さらに、theについては、“What animal do you like the best?”に見られるように最上級が導入されることも一因である。

表3 likeのコロケーション

<i>Hi, friends!</i>		中学校教科書	
Word	頻度	Word	頻度
1	I	I	79
2	like	to	46
3	and	the	44
4	you	it	30
5	do	a	30

5.2.3 goのコロケーション

表4は、goの共起語のリストである。小学校で使われているstraightはgo straightとして、主に道案内の表現として用いられるものである。このように小学校では道案内という限られた場面において、相手とのやりとりの中でgoが使われる傾向にあるが、中学校ではgo to schoolなど、道案内に限定されず、一般的に行き先を述べる傾向へと変化が見られる。また、小学校においてはlet'sが高頻度で共起していることから、“Let's go to Italy.”に代表されるように、goは勧誘する機能として使用されることが多い。

一方、中学校では、I, the, andが、高頻度で共起していることが分かる。このことから、中学校の検定教科書においては、goはむしろ、自己表現として、さらに、“I want to go and see Kinkaku-ji again in the future.”のように、その場所ですることなどの関連する情報を、andを使って付加する形で使用されていることが示されている。ここでも、これまでの動詞と同様、ひとつの題材に関連したまとまりのある文章と、接続詞を伴うなどの複雑な構成が中学校の特徴であることが示唆された。

表4 goのコロケーション

<i>Hi, friends!</i>		中学校教科書	
Word	頻度	Word	頻度
1	straight	to	102
2	to	the	42
3	go	and	25
4	turn	I	16
5	let's	a	16

5.2.4 amのコロケーション

表5は、amの共起語を示したものである。興味深い点としては、*Hi, friends!*におけるamの共起語頻度の第3位として、同じamが挙げられている。コンコーダンスラインを確認すると、“I am fine. I am fine.”同じ文章を何度も繰り返している場面や、“I am strong. I am brave.”など、“I am ~”を使って様々な形容詞を当てはめる表現が繰り返されているこ

とがその原因であること分かった。“I am ~”という自分に関することを表す、一番基本的な表現をチャンツや繰り返し練習を通じて何度も口にする事によって、表現に慣れ親しませようとする意図が感じられる。

対して、中学校英語教科書において、*to* が特徴的に現れているのは、“I am here to speak for all future generations.” など、小学校で慣れ親しんだ自分に関することの表現に加え、さらに *to* 不定詞の副詞的用法を用いて、行動の目的を表す情報を付け加える表現が多く出現していることが原因であることが分かった。また、中学校では、未来を表す表現として “I am going to” を学習することも *to* の共起頻度の高さの大きな要因と考えられる。より長く、複雑な文を用いることに加えて、現在のことだけではなく、過去や未来などに関して幅広い表現を学習するのが中学校英語教科書の特徴であることが、このデータから見て取れる。

表5 amのコロケーション

	<i>Hi, friends!</i>		中学校教科書	
	Word	頻度	Word	頻度
1	I	24	I	16
2	strong	15	are	12
3	am	13	in	9
4	good	9	to	9
5	are	9	the	8

5.2.5 areのコロケーション

表6は、*are* の共起語のリストである。*are* のコロケーションとして、*you* が *Hi, friends!*、中学校英語教科書共に最も高頻度な語として現れている。*are* が二人称のみで使用され、ほとんど主語に *you* しかとらないという特徴が伺える。

さらに、*am* と同様に、中学校英語教科書において *to* が現れているのは、目的を表す *to* 不定詞や、“be going to” との共起頻度が高いからだと考えられる。

am, are 共に *Hi, friends!* では *strong, good, are* では *friends* が特徴的なコロケーションとして現れている。コンコーダンスラインを確認したところ、これらは、*Hi, friends!* の Lesson 7、「We are good friends.」の単元でのみ出現していることが分かった。この単元では、「桃太郎」の物語を教材に学習を進めていく。物語の中で出てくる “We are strong and brave.” や “We are good friends.” の表現をチャンツや教師による読み聞かせ、児童のスキットを通して何度も耳にし、口にするため、高頻度での共起につな

がっていると考えられる。しかし、一般的な使用場面において *am, are* といった自己や相手の状態や気持ちを表すのによく使われるこれらの動詞が、上記のような限られたバリエーションでしか使われていないことは、学習者の将来の英語使用にとっては問題となる可能性も考えられる。小学校においても、授業の導入のあいさつや、スモールトークなどを活用し、様々な表現を通して *am* や *are* に慣れ親しませる必要があると考える。

表6 areのコロケーション

	<i>Hi, friends!</i>		中学校教科書	
	Word	頻度	Word	頻度
1	you	34	you	160
2	I	15	the	57
3	strong	10	to	56
4	good	10	in	47
5	friends	9	I	35

5.2.6 RQ2への考察

以上から、「*Hi, friends!* の高頻度動詞のコロケーションは中学校英語教科書と比較してどのような違いがみられるか」という RQ2への答えとして以下のことを考察した。

まず、大きな特徴の1つとして、*Hi, friends!* ではコロケーションに内容語が多いことに比べて、中学校英語教科書では前置詞や冠詞などの機能語が多くみられることが挙げられる。RQ1でも触れたが、*Hi, friends!* では単純で短い文が中心であること、中学校英語教科書では節や、接続詞、前置詞を伴ってより複雑で長い文を扱うことが要因として考えられる。小学校では、内容語を中心に扱うという特徴から、多くの活動を通して語彙のインプットを行い、それらに慣れ親しんでおくことによって、初見の表現に触れた際にも意味を推測できる力を育て、より発展的な学びにつなげることができるだろう。また、機能語は *Hi, friends!* では多く扱われていない分、中学校の初級段階において指導をする際は、チャンクで区切って指導するなど段階的に指導を行う工夫を要するものと考えられる。

2つ目に、*Hi, friends!* では、*like* のコロケーションとして *I* や *and, like* が何度も現れていること、*go* のコロケーションとして *let's* や *straight, turn* が現れていること、また、*am* や *are* のコロケーションとして *strong* や *good, friends* が現れていることから、チャンツに代表される定型表現の繰り返しが *Hi, friends!* において大きな割合を占めていることが中学

校英語教科書との大きな違いだといえる。同じ形の表現を内容語だけを変えながら、繰り返し口にすることによって、英語の表現に慣れ親しむことができるという点において、*Hi, friends!* は、小学校学習指導要領の外国語活動編の目標の一つにある、「外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。」という点に合致しているとみなすことができよう。用意されている表現を後に続いて繰り返すという活動によって表現に慣れ親しみ、徐々に自分で言いたいことをその慣れ親しんだ表現を使って話し、中学校では話すだけでなく、書き、様々な形の英文を運用していくという段階的な学習の発展を見ると、チャンツを始めとした活動が、小学校段階において非常に大切だと見なすことができる。

5.3 一般的な語彙コーパスとの比較について

次に、*Hi, friends!* と中学校教科書に、ネイティブスピーカーによって使用される英語と比較してどのような特徴がみられるのかを、語彙の点から考察したい。上述のように、BNCと比較して、それぞれの教材に特徴的に高頻度、または低頻度で出現している動詞をAntConcのKeyword List機能を活用して抽出した。

5.3.1 特徴的高頻度動詞の比較

表7は、特徴的高頻度動詞を表したものである。*Hi, friends!*、中学校教科書共に、BNCと比較して高頻度で出現している動詞は、*like, eat, do, go, play*である。いずれも教室でよく使われる動詞であることは言うまでもない。特徴的高頻度語として抽出されたということは、データ全体のバランスの中で、極端に多く使用されていることを示す。*like*は「～を好む」、*eat*は「～を食べる」、*do*は「～をする」、*go*「行く」のように、基本的に1つの意味しか持たない動詞である。*have, get, take*のような多岐に渡る意味を持つ動詞と比較して、用法のバリエーションが少ない。したがって、一般的にはあまり高頻度では使用されない動詞でありながら、特に初級学習者には分かりやすい動詞であるため、*Hi, friends!* や中学校英語教科書において特徴的に高頻度で現れているのだと考えられる。*play*は*Hi, friends!*において“I can play soccer”などの“I can”と共起して使われている。それに対して、*Hi, friends!* のみに特徴的高頻度動詞として現れているのが、*am, listen, swim,*

*ride*である。*am*に関しては、自分に関わる表現(“I am Taku.”, “I am happy.”)が多く出現する為だと考えられる。特に小学校においては、三人称を扱うことが難しいため、どうしても自分と相手のやり取りがメインとなることも、*am*が特徴的高頻度語に抽出された理由であろう。*listen*に関しては、*Hi, friends!*、中学校英語教科書共に、ほぼ全て“Listen carefully.”など教室内で使われる英語の指示の表現のみで出現している。しかし、中学校英語教科書では、*listen*が教師の指示としてではなく、生徒が学習する教科書本文の英文として現れているため、特徴語としては抽出されなかったと考えられる。*swim, ride*に関しては、*Hi, friends!*のコンコーダンスラインを確認すると、どちらも“I can ~”の表現で使われている。“I can ride a unicycle”, “I can’t swim.”のように、「一輪車に乗れる」、「水泳ができない」などは、小学生にとって、できるかどうか明確に分かれる動作である。お互いに出来ること、出来ないことを聞き合う活動において、児童は対話の相手がどのような返答をするか予測することは難しい。したがって、インフォメーションギャップが生まれ、より効果的なコミュニケーション活動を行うことができる為、*Hi, friends!*では特徴的に高頻度でこれらの動詞が使用されていると考えられる。さらに、中学校英語教科書においても*can*を使用した表現は多く出現しているが、*can*のコロケーションを確認すると、*Hi, friends!*では11種類と限られた数の動詞のみが続いているのに対して、中学校英語教科書では97種類という非常に多くのバリエーションの動詞を使用されている。このことから、*Hi, friends!*では数少ない動詞のバリエーションの中で、繰り返し同じ表現を使っていることから、これら2つの動詞が*Hi, friends!*のみで特徴的高頻度動詞に挙げられたのだと考えられる。

表7 特徴的高頻度動詞

	<i>Hi, friends!</i>		中学校教科書	
	Word	頻度	Word	頻度
1	is	323	do	588
2	go	100	like	431
3	like	119	eat	111
4	do	118	play	140
5	am	67	go	245
6	play	57	enjoy	74
7	listen	26	went	147
8	swim	18	see	253
9	eat	19	look	153
10	ride	15	did	203

5.3.2 特徴的低頻度動詞の比較

表8は、BNCとそれぞれの教科書を比較して特徴的に低頻度で現れている動詞を表したものである。中学校の特徴的低頻度動詞では、*was*を始めとした過去形（過去分詞形）の動詞が8種類入っている。*was*が中学校の教科書のどこで使われているのかを確認すると、*was*はほぼ全ての教科書で2年生と3年生用教科書に現れていた。過去形は中学校から取り扱われるので全体的に多く出現するイメージがあるが、実際には過去形が本格的に指導され始めるのは中学校2年生からであるため相対的に頻度が低くなり、その結果、特徴的低頻度動詞として現れたと考えられる。*Hi, friends!*の特徴的低頻度語として抽出された、*know, think, find, feel*などの動詞は、*that*節を用いて自分の考えや気持ちを表す動詞である。小学校では、“I am sad.”のように*am*を用いて自分の気持ちに表すことがあっても、これらの動詞を使って“I found it difficult.”のように自分の気持ちを表すことは多くないと考えられる。それが、これらの動詞が特徴的低頻度動詞とされた一因であると考えられる。

表8 特徴的低頻度動詞

	<i>Hi, Friends!</i>		中学校教科書	
	Word	頻度	Word	頻度
1	have	7	was	665
2	be	27	be	221
3	know	3	were	188
4	give	1	had	125
5	find	1	used	55
6	feel	1	say	45
7	think	4	found	37
8	put	3	told	24
9	practice	1	held	18
10	read	1	knew	15

5.3.3 一般的なコーパスとのz得点の相関

最後に、表9は*Hi, friends!*、中学校英語教科書、BNCの3者それぞれの高頻度で現れた動詞20語のz得点を算出し、それぞれの相関を表したものである。*Hi, friends!*と中学校教科書の相関は、 $r = .91$ と非常に高い数値を示している。ここから、*Hi, friends!*と中学校英語教科書は、高頻度動詞上位20語における頻度においては同様の傾向を持っていることが分かる。*Hi, friends!*と中学校英語教科書は共通する動詞を多く含んでいることを示しており、教材の点からは、小・中学校のスムーズな連携がなされているということが出来る。一方、中学校では、小学校の語彙をベー

スにしつつ、新出する語彙が含まれていることから、*Hi, friends!*と中学校英語教科書の語彙の相違を明らかにすることで、より円滑な小・中学校の英語教育の連携に繋がることと考えられる。また、*Hi, friends!*とBNC、中学校英語教科書とBNCのそれぞれの相関を比較してみると、それぞれ、高い相関が観察された。高頻度動詞については、*Hi, friends!*と中学校教科書とも、BNCと近い傾向を持っていることが明らかになった。また、中学校英語教科書の方がより、BNCに近い関係にあることがこれらの相関の値から分かる。これは、中学校英語教科書が*Hi, friends!*と比較して、より多数の語彙から構成されていること、中学校英語教科書は*Hi, friends!*と異なり、チャンツに代表されるような、同じ文の繰り返しが少ないこと、過去形や助動詞など様々な形で動詞が使用されていること、決まり文句としてではなく、さまざまな名詞や節などを伴う形で動詞が使用されていることが要因として挙げられる。また、小学校、中学校、そして一般的に使われる英語コーパスと相関の値が上がっていくことから、小・中学校の英語教育を経ると、段階的に一般的な英語語彙に近づいていく様子が伺える。本研究では、対象としなかった高等学校や大学で使用されている教材について、今後、同様の研究を行うことで、教材における小学校から大学までの連携の在り方を考察する必要性が示唆されている。

表9 高頻度動詞20語のz得点の相関

	<i>Hi, Friends!</i>	中学校教科書	BNC
<i>Hi, Friends!</i>	1.00	—	—
中学校教科書	.91	1.00	—
BNC	.73	.83	1.00

5.3.4 RQ3への考察

これらのことから、「*Hi, friends!*と中学校英語教科書はネイティブスピーカーによって使用される語彙と比較してどのような違いがみられるか」というRQ3への答えとして以下のことを考察した。まず、*Hi, friends!*は一般的なコーパスと比較すると、*swim*や*ride*といった小学校の中で行われる小学生ならではの動作が特徴的に高頻度で現れ、*think*や*feel*といった自分の心の中を表現する動詞が特徴的に低頻度で現れているという特徴から、*Hi, friends!*では自分の身の周りの動作を表現するということが中心になっていると考えることができる。小学生に対しては、動作と語彙を関連付けるために、ジェスチャーを用いながら活動を行うなどの学びであるからこそその活動が、語彙

に慣れ親しむ上で、有効な手段であるといえるだろう。

中学校英語教科書では、過去形を扱うにも関わらず、それらが一般的なコーパスと比較すると特徴的に低頻度な動詞であることが本研究で明らかになった。過去形は自らの経験を話したり、物語で多く使われたりと、英語を学習する中でとても重要な言語形式であることは間違いない。授業において、教師は教科書以外にも、過去形を含む英文を導入するなど、インプットの機会を意図的に多く与えることが、大切なことである。

6 まとめと教育的示唆

本研究では、*Hi, friends!* 及び中学校英語教科書における語彙を、動詞に着目して比較することによって、これからの学校英語教育に役立つ示唆を模索した。まず、*Hi, friends!* で高頻度で現れている動詞やそれらに続くコロケーションには、児童にとって身近な語彙が意図的に使われていることが分かった。このことから、身の周りに関連するテーマを教材にする、他教科と関連した横断的な授業を行うなどにより効果的に児童が英語を身近に感じ、児童の内発的動機づけにつながるものと考えられる。例えば、近年注目されているスモールトークの内容を、より児童の普通の生活や学習と関連付けて行うことも、*Hi, friends!* の特徴を踏まえると可能だと考えられる。他校種よりもより児童と過ごす時間が長い小学校の教員こそ、この特徴を生かした授業を組み立てることができれば、児童がより意欲的に取り組むことのできる授業とすることができるだろう。

次に、*Hi, friends!* では、“I play soccer.” など単純な文がほとんどであるのに対し、中学校英語教科書では“I am here to speak for all future generations.”を始めとした接続詞や to 不定詞を使ってより複雑で長い文章を扱っているという特徴が見られた。小学校では基本的であり複雑ではない表現に聞くことを通じて慣れ親しみ、中学校ではより複雑な表現へとステップアップするという小学校と中学校の連携したカリキュラム構造があると考えられる。このことから、小学校では、中学校で長く複雑な文章を取り扱った時

に、小学校での学びを思い出し、活用できるように多くの意味のあるインプットを通して表現に慣れ親しむように指導する必要がある。中学校では、より長い文になればなるほど、文節で区切ってより文構造を理解しやすくなるよう工夫する、また新出の文構造や文法項目の場合はアウトプットよりもインプットに重点をおいて学習を進めるなどの必要がある。例えば、“I know that you are a famous soccer player.” という文を指導する際に、“I know that” と “you are a famous soccer player.” に区切ることで、それぞれが小学校で学習したようなシンプルな文章になり生徒の理解を補助するだろう。さらに、新出の項目は、インプットが十分ではないため、様々な場面を使って教員や ALT がスキットを行って音声的、また視覚的にインプットを行うことが効果的だと考えられる。

以上のように *Hi, friends!* と中学校英語教科書を比較することで、表面的な教材分析からは見えてこなかった、それぞれの教材の特徴を洗い出すことができた。ただし、本研究のデータには、小学校で新教材として発表された高学年向けの *We Can!*、中学年向けの *Let's Try!* が含まれていない。これからの研究の方向性としては、これらの教材と *Hi, friends!* の新旧の教材を比較することや、また *We Can!*、*Let's Try!* と中学校英語教科書を縦断的に比較することによって、本研究の結果を発展させていきたい。

参考文献

- Goulden, R., Nation, P. and Read, J. (1990). How large a receptive vocabulary be? *Applied Linguistics*, 11, 4, 341-363.
- 文部科学省 (2017). 『小学校外国語指導要領 外国語活動編』 東洋館出版社
- Nation, I.S.P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐藤剛 (2013). 「中学校教科書の語彙分析」『弘前大学教育学部教育実践総合センター研究員紀要』第11号, 33-42.
- 投野由紀夫 (2006). 『投野由紀夫のコーパス超入門：コーパスでわかる英語学習のコツ』小学館.
- Zechmeister, E.B., Chronis A.M., Cull, W, L., D'Anna, C.A. and Healy, N.A. (1995). Growth of a functionally important lexicon. *Journal of Reading Behavior*, 27, 2, 201-212.

(2018. 7. 18 受理)